

トク・ピシンの未来時制マーカー*bai*について

The future tense marker *bai* in Tok Pisin

岡村 徹

Toru Okamura

公立小松大学

Komatsu University

Abstract: The aim of this paper is to consider the nature of the future tense marker *bai* in Tok Pisin. We will examine the data as viewed from a discourse grammar perspective. Furthermore, I would like to show the nature of *bai* in the relationship with new/old information theory. *Bai* can be used not only in a sentence initial position but also after the subject. Generally speaking, *bai* can be placed before the subject for short subjects and can be placed after the subject for longer subjects. On the other hand, *bai* is often omitted in the sentence when the two participants understand the meaning from the context. What is remarkable is that no studies have ever tried to demonstrate its nature as viewed from the discourse level. We will consider the use of *bai*, paying attention to the issue of discourse grammar. We will point out that the position of *bai* in the sentence is related to factors such as new/old information and Silverstein's Noun-Phrase Hierarchy. The study will contribute to our understanding of other English-based Pidgins and Creoles such as Solomon Islands Pidgin and Bislama.

Key words: Tok Pisin, future tense marker *bai*, discourse grammar, *bai* preposed/ unpreposed type, new/old information

はじめに

パプアニューギニアの共通語である、トク・ピシンは、未来の出来事を表すとき、英語の *by* and *by* に由来する、*bai* という文要素を用いる。しかしその統語的・意味的な現象は決して容易ではなく、未解明な部分も多い。

トク・ピシンで、‘私は行く’は次に示すように三通りの表現が可能である。例文(1)と(2)は、未来時制マーカー（以下、FTMとする）が主語に前置している例である（*文法的な注釈は注を参照のこと）。*bambai* を使った例文(1)のほうが(2)よりも先に存在し、現在ではその使用は高齢層に限定される傾向がある。例文(2)の *bai* は *bambai* の最初の音節が脱落した形式である可能性が指摘されている¹。例文(3)は、その *bai* が述語動詞の前に置かれている表現である。この表現形式は、歴史的に一番新しいと考えられている。

- | | | | | | |
|-----|--------|-----|-----|-----|--------|
| (1) | Bambai | mi | go. | | |
| | FTM | 1sg | 行く | | ‘私は行く’ |
| (2) | Bai | mi | go. | | |
| | FTM | 1sg | 行く | | ‘私は行く’ |
| (3) | Mi | bai | i | go. | |
| | 1sg | FTM | PM | 行く | ‘私は行く’ |

本論文では、トク・ピシンで書かれた新聞や物語に対象を絞り、FTMを含む例文を観察する。それぞれの言語環境ごとに出現しやすい主語の種類があるかどうか、どんな特徴を有しているか浮き彫りにする。加えて、述語動詞の種類と未来時制マーカーとの関係についても考える。

次の第1節では、FTMに関する先行研究を概観する。

1. 先行研究

FTMに関する重要な研究をいくつか取り上げる。Romaine (1992) は、トク・ピシンの未来時制マーカー*bai*の統語的な現象を通時的な観点から検証した。その結果、*bai*のとりうる三つの統語的位置について、初期の段階で句の冒頭に現れた*baimbai*に形態的・音韻的な縮約が起こり、それが*bai*に移行したのは、1950年代および1960年代のことで、さらにそれが動詞の前に生じるようになったのは後の段階だと推測した。

その点は、Keesing (1988:182) も同様の解釈をしており、メラネシア・ピジンの発展において、動詞の直前に前置する統語法は、後の段階で成立したと考えられている。特にそれはクレオール化の初期の段階で起きたとする。英語母語話者にとって、*by and by*は、文頭に出現する要素であり、その彼らがトク・ピシンを使うときは、やはり文頭の位置で使う。それが上層語としてメラネシア人話者にも影響を与えたと考えられる。しかしながら、基層語となった、ソロモンやバヌアツの諸言語では、動詞に前置する型が一般的である。

Romaine (1992) は、それを説明するために、九つの地域に分けて、実証的に研究をおこなった。さらに年齢や地理的な差異との関係も考察した。その結果、高齢層は節を導く*bai*の形を選好し、若年層は動詞に前置する*bai*の形式を選好する傾向があることがわかった。

さらに意味論的なアプローチの重要性を説き、*bai*は命令、意志、目的、提案、仮定の意味を伴う節の中で出現しやすいと指摘した。動詞の前に生じる*bai*は未来、習慣、連続、実現可能な意味を有する節の中で、節を導く*bai*は特に*sapos*に導かれた主節の条件あるいは状態に依存する意味を伴う中で生じやすいと報告した。

周辺の接触言語との関連で重要な研究が他にもいくつかある。まずソロモン諸島ピジンに

関して、Jourdan (1985) は、36才以上の話者は**bambae**や**babae**を、若者は**bae**を使う傾向があると報告した。バヌアツ共和国のビズラマ語に関しては Crowly (1990: 208) が**bae**のほうが**bambae**よりも広く普及しているとの報告をしている。今日トク・ピシンにおける**baimbai**も、同様の過程を辿っていると考えて良いだろう。

次の第2節では、FTMを含む文をもう少し整理しておきたい。

2. トク・ピシンの未来時制マーカー

本題に入る前に、トク・ピシンの未来時制を使った表現をもう少し観察しておきたい。

まず、*bai*は主語に前置する場合と後置する場合とがあることはすでに述べた。例文はそれぞれ(4)と(5)。例文(4)をここでは*bai*先行型と呼ぶことにする。そして例文(5)を*bai*後行型と呼ぶ。例文は、岡村 (2005, 2007) から収集したが、この資料を基に分類すると、*bai*先行型は、49の例文中14例、*bai*後行型は35例あった。

- (4) Bai mi silip liklik long bed.
 FTM 1sg 寝る 少し P ベッド
 「私はベッドで少し寝ます」岡村 (2007: 19)

- (5) Mi bai i ken skelim.
 1sg FTM PM AUX 判断する
 「私が判断できるでしょう」岡村 (2007: 87)

*bai*後行型は、名詞句主語の長短にかかわらず生じるが、概して下記の例文(6)にあるように、主語名詞句が長い場合によく生じる傾向がある。

- (6) Moa long 200 gavman opisa bilong Australia
 多い よりも 200 政府 職員 GEN 豪州
bai kam wok long PNG.
 FTM 来る 働く P パプアニューギニア
 「豪州から 200 人以上の政府職員がパプアニューギニアに仕事をしに来る」岡村 (2007: 61)

例文(6)の*bai*を文頭に移動させた場合 (例文7)、非文とまでは言えないが、トク・ピシン使

用者の容認可能性が下がる。

(7) ?**Bai** moa long 200 gavman opisa bilong Australia kam wok long PNG.

*bai*先行型の文は、名詞句主語の長短にかかわらず機能するが、どちらかと言うと、それが生じる言語環境としては、名詞句主語が短い場合に出現するようである。

次の第3節では、新聞と文学作品から集めた用例を比較し、FTMの述語や主語との関係を見る。

3. 未来時制マーカーと文体

ここでは文体による違いが、*bai*の統語的な振る舞いにどのように作用するかを考察する。下記の表は、*bai*と述語動詞の関係を表す。用例は新聞の政治・経済欄から、比較的出現数の多い主要な動詞のみを取り上げている²。括弧内は、文学作品から集めた用例数である。

表からは、二つのことがわかる。まず、新聞であろうが、文学作品であろうが、*bai*とともに使用される述語動詞の種類は、ほとんど変わらないということである。つまり、*bai*とともに使われる述語動詞が、何らかの意味的な制約を受け、特定の動詞群とのみ共起するわけではないということである。

表1 *bai*と述語動詞 ワントク新聞より（括弧内は文学作品）

動詞	<i>bai</i> 先行型	<i>bai</i> 後行型
go (行く)	13 (18)	25 (1)
kamap (なる)	9 (11)	22 (4)
kisim (得る)	17 (5)	14 (0)
helpim (助ける)	2 (5)	12 (1)
stap (いる)	3 (15)	11 (1)
mekim (する)	11 (23)	8 (0)
gat (持つ)	8 (6)	8 (1)
givim (与える)	0 (11)	7 (0)
kam (来る)	4 (6)	5 (1)
lukim (見る)	8 (6)	4 (0)
karim (運ぶ)	5 (0)	3 (0)
tok (言う)	4 (12)	3 (0)

もう一つは*bai*の性質を理解するうえで重要な点だが、それは、文学作品では、それぞれの述語動詞が*bai*先行型を、新聞では*bai*後行型を選好している点である。これは大きな相違点であるが、これまでの研究で、このことに気がついた研究者はいなかった。これはおそらく、文学作品では登場人物の心理的な描写に重点が置かれることと関係があるだろう。そこでは1～3人称の単数主語が頻繁に使われ（表2）、心理的な側面が描写されている。これに対して、新聞では、組織や機関名を表す主語が多く出現する。そのために主語が長くなり、*bai*後行型が好まれるのである。

次に、*bai*と人称代名詞との関係を見る。主語が1～2人称のとき、*bai*は先行型をとる傾向にある。それは新聞でも文学作品でも同じ傾向にある。特に文学作品のほうが、その傾向が強い。文学作品では全般的に*bai*先行型が多い。特に主語が固有名詞等の名詞句主語において顕著に認められる。Dutton (1973: 55) は、代名詞や単一語のように主語が短いときは、主語の前に*bai*が、一方、主語が長いときは主語の後ろに*bai*がくる傾向があるとすでに指摘しているので、上記の結果はDutton (1973) の指摘を部分的に検証したことになる。ただし、Dutton (1973) は、文体的な差異に基づく違いについては触れていない。

一方、*bambai*の用例は新聞から6例、文学作品から7例採取できたが、すべて*bai*先行型であった。全体の用例中に占める、*bambai*文は、1.7%に過ぎない。その用例の全てが、1970年代の資料からであった。今日の新聞ではそれが観察できないことを考えると、この文要素は年代とともに衰退しつつあることがわかる。先行型から後行型へのシフトは、*bambai*から*bai*へ移行する過程で起きたと考えられる (Sankoff and Laberge 1973 in Romaine 1988: 138)。

Sadler (1973) には、*bai*を含む豊富な用例がある。しかし、その大部分が*bai*先行型の例文として取り上げられている。これは当該資料が、トク・ピシンの学習者用に作成されているため、主語も短い例文が多い。*mi*や*yu*といった短い代名詞が用いられると、*bai*先行型になりやすい。Sadler (1973) の資料で大事なのは、*bai*の統語的振る舞いが、強調という概念と結び付いているという指摘である³。例えば、*bai*先行型の例文、*Bai em i no save long tok bilong yu.* (He will not understand your talk.) は、話者によって何も強調の意味を伴わないが、*bai*後行型の例文、*Em bai i no save long tok bilong yu.* (同上) は、強調の意味を伴うという (p. 133)。しかしこの指摘については、同意しかねる。もし、これが事実であるとするれば、下記の表2から、名詞句主語の例文はその多くが強調の意味を伴っていることになる。したがって、単純に統語的な振る舞いだけが、強調の意味を決定するのではなく、むしろ、アクセントやイントネーションの問題がその振る舞いを左右していると考えたほうが妥当性を有する。

表2 **bai**と人称代名詞 新聞資料より () 内は文学作品

人称	bai 先行型	bai 後行型
mi	25 (74)	4 (0)
yu	27 (39)	5 (1)
em	11 (33)	43 (9)
mipela	13 (2)	7 (0)
yumi	15 (12)	5 (0)
ol	41 (6)	37 (1)
NPS	74 (61)	178 (6)

次の第4節では、表2に出現した名詞句主語（NPS）に対象を絞り、**bai**の無生物名詞との相性を探る。

4. 未来時制マーカーと名詞句階層

4.1. **bai**後行型と情報構造

ここでは表2で観察した名詞句主語文を別の角度から捉える。いわゆる無生物主語他動詞文における**bai**の性質について考える。まずどのような種類の無生物主語が生じるのか、**bai**先行型と**bai**後行型とに分けて考える。

上記の表2の名詞句主語を伴う無生物主語他動詞文は全部で41例あった。そのうち**bai**先行型が14例、**bai**後行型が27例あった。**bai**先行型の例文は下記の例文(8)のとおりである。*maket* ‘市場’は具体名詞で、\$5,000 ‘5千ドル’は抽象名詞である。これは名詞句階層理論に即した用例である。**bai**先行型の多くが、名詞句階層に即した働きをしており、「具体名詞—抽象名詞」の組み合わせが7例、「具体名詞—具体名詞」の組み合わせが5例、「抽象名詞—抽象名詞」の組み合わせが2例あった。いずれも無生物主語他動詞文で、主語名詞のほうが目的語名詞よりも階層が同じか高い。

- (8) Kaunsil i ting olsem bai dispela maket i
 Council PM think like FTM this market PM
 kostim \$5,000 dola.
 Cost \$5,000 dollar (WANTOK-Trinde, 20 Septemba, 1972-Pes 15)

「この市場の建設には5,000ドルかかると、議会は考えているでしょう」

一方、*bai* 後行型の例文は下記の例文(9)の通りである。この例文では、抽象名詞が主節の名詞句主語となり、3人称代名詞が主節の目的語名詞となっている。これは明らかに名詞句階層理論に違反する用例である。この用例では、*bai*に前置する指示代名詞 *dispela samting* ‘このようなこと’が旧情報を担っている。その証拠にこの指示代名詞の部分は声を低くして強勢を置かない。条件節の部分が話者によって発せられた時点で、話者・聴者が共にもっている知識ということになる。つまり前の文脈から聴者が容易に引き出すことができる情報である。*dispela samting*の現われ方は順行的である。これは *sapos*で始まる従属節の意味内容を受けた旧情報である。ハリデー流に言えば、これは主節における‘メッセージの出発点’であり、情報の重要度という点で言えば、それほど重要ではないと言える。主節の部分は音調的に言えば、「やや強-弱-強」となり、*bagarapim*の部分が情報の重要度という点では一番重要であり、音調も強くなる。

ジャンル別に名詞句階層に違反する用例を観察すると、特に物語文でその出現率が高い。これは談話文法的にも理にかなっていると言える。なぜならば、*bai*に先行する主語は前の文脈の旧情報であることが多いためである。文章の流れとしては自然である。*bai*先行型になると、その旧情報の部分が*bai*という文要素で一旦、情報が遮断されてしまい、物語特有の流れるようなテキストを形成できないためではないかと考える。

違反する用例は他にも、「抽象名詞—3人称代名詞」の組み合わせが2例、「抽象名詞—1人称代名詞」が1例、「具体名詞—人間名詞」が2例、「抽象名詞—人間名詞」が1例、「抽象名詞—具体名詞」が1例であった。*bai*先行型にはこうした名詞句階層に違反する例が見られなかった点を考慮すると、*bai*先行型のほうが基本語順としての特徴を有していると言って差し支えないと考える。*bai*後行型は上記の際立った特徴を有しており、そういう意味において *marked*な語順と言える。なお、*bai*後行型において、名詞句階層に即した働きをする用例は、「具体名詞—具体名詞」の組み合わせが9例、「具体名詞—抽象名詞」の組み合わせが11例あった。

- (9) Sapos mi slip wantaim dispela yangpela meri
 If 1sg sleep with this young woman
 mi laikim tumas, dispela samting bai i
 1sg like too much this something FTM PM
 bagarapim em.
 bugger 3sg Trobisch (1972: 32)

「自分がとても好きなこの若い女性とベッドを共にすれば、この行為は彼女を傷つけてしまう」

4.2. *bai*後行型と情報構造

もう一つ上記の例文(9)と類似する表現を観察してみたい。この文も名詞句主語が具体名詞 *skul* ‘学校’、目的語名詞が人間名詞 *manki* ‘男の子’ などで名詞句階層に違反する。この中で *bai*に前置する文要素 *dispela kain skul* ‘この種の学校’ は旧情報である。なぜならば前の文脈で、*skul* ‘学校’ についての言及があるからである。したがって、名詞句主語それ自体の情報の重要度も低いと言える。

Skulanka. 教育事情に詳しいオレワレ氏

(10)	Em	i	tok,	skul	hia	i	antap	long
	He	PM	talk	school	here	PM	superior	P
	praimeri	skul,	tasol	i	aninit	long	haiskul.	
	primary	school	but	PM	under	P	high-school	
	Olsem	tasol	dispela	kain	skul	bai	skulim	ol
	thus	only	this	kind	school	FTM	teach	PL.
	manki	long	fom	1,	fom	2	na	tu
	boy	P	form	1	form	2	C	two
	long	ol	arapela	samting				
	P	PL.	other	something				

(Wantok-Trinde, 20 Septemba, 1972-Pes 11)

「この地域の学校について言えば、小学校は優れているが、中等学校は劣る。したがって、この種の学校だけが1学年や2学年、あるいはその両学年の子どもたちの諸々の事柄を指導できる」

類例は他にもある(例文11)。*bai*に前置する名詞句 *amblens* ‘救急車’ は前の文脈で一度出現している。加えて、この文は名詞句階層に違反している。*amblens* ‘救急車’ は生産物/道具、*em* ‘彼’ は3人称。

(11) Wanem samting i wok tru bilong ol draiva bilong amblens? Ol draiva i sindaun long haus sik na sapos wanpela sikman em i mas kam long haus sik, orait amblens bai i go na kisim em long ples em i kisim bagarap long en. (Wantok-Trinde, 6 Septemba, 1972-Pes 8)

「救急車に乗車する運転手は何をなすべきか? 運転手らは病院で待機し、病人が出たら、病院に連れて来なければならない。救急車は怪我をしている病人のいる村まで患者を迎えに行き、病院まで連れて来なければならない」

ところが次の用例 (12) では、*bai* 後行型ではあっても、*bai* に前置する文要素 *Australia* ‘豪州’ が新情報としての役割を担っている。通常、新情報は文の右端のほうに置かれるが、ここでは文の左端にあるので当然、そこは強く読まれる。しかしながらよく観察すると、この文は名詞句階層に違反していない。*Australia* ‘豪州’ は具体名詞、\$127,800,000 ‘1億2,780万ドル’ における数字は抽象名詞である。どちらも階層のうえでは差がない。それに加えて、*Australia* には背景に豪州政府、つまり人の存在を想起させるものがある。このように名詞句階層に即した働きを見せる場合、*bai* 後行型は新情報を担い、この逆に名詞句階層に違反する働きを見せる場合、旧情報を担う、といった対応関係が認められる (表3)。

表3 *bai*後行型と名詞句階層と新/旧情報との関係

<i>bai</i> 先行/後行	名詞句階層違反の有無	新/旧情報
後行型	無	新
後行型	有	旧

Mani bilong baset 政府予算

(12)	Hamas	mani	yumi	mas	gat	bilong	ranim	kantri
	how much	money	1pl.	must	obtain	GEN	pursue	country
	na	bai	yumi	kisim	dispela	mani	we.	
	C	FTM	1pl	get	this	money	where	
	Man	bilong	ritim	baset	em	i	Mista	Julius
	man	GEN	read	budget	it	PM	mister	Julius
	Chan,	minister	bilong	ol	mani	na	beng.	Em
	Chan	minister	GEN	PL.	money	C	bank	it
	hia	sampela	tok	bilong	em:	\$222,650,000-		em
	here	some	talk	GEN	it	\$222,650,000		it
	i	moa	olsem	tu	handet	million	dola.	
	PM	more	than	two	hundred	million	dollar	
	Dispela	hip	mani	bai	Papua	Nu	Gini	i
	this	heap	money	FTM	Papua	New	Guinea	PM
	lusim	Australia	bai	givim	\$127,800,000		bilong	helpim
	lose	Australia	FTM	give	\$127,800,000		GEN	help
	yumi	long	dispela	yia.	(Wantok-Trinde, 6 Septemba, 1972-Pes 13)			
	lpl	P	this	year				

「国を動かすのにわたしたちはいくらないといけないのか？そしてこのお金をどこから調達するのか？この予算を読み取る人はジュリアス・チャン首相、財務大臣そして銀行である。2億2,265万ドルを口にする者もいれば、別の者も同様の予算を口にする。いずれにしても2億ドル以上になる。国はこのまとまったお金を維持できるか？豪州なら、1億2,780万ドルをわたしたちに援助してくれる」

私たちはどこかの国から資金を調達する、という命題があって、そのうえでそれはどこの国からか、と尋ねているので、*Australia*は旧情報を担っていると言える。つまり、*yumi kisim dispela mani from X*. という前提があって、そのXの部分に生じる集合の中から、他の地域や国ではなく、*Australia*を選んだのである。その選ばれた文要素が文頭に立ち、さらにそれと共起する述語動詞が選択され、*Australia i givim...*となっているので、この旧情報の部分は一種の前提と呼ぶことができる。聴者が一般的知識として、それを知っていると話者が判断した結果、発話がなされたのであれば広い意味での旧情報を担っていると解釈できるのである。

上記の訳文「豪州なら、1億2,780万ドルをわたしたちに援助してくれる」(下線、訳ともに筆者)にもあるように、下線部はかなり聴者の関心をひく部分である。そこにはXでもなければYでもない、「豪州が…」といった意味合いがある。主題としてかなり際立っている。前の文脈でその文要素が出現しておらず、ここでは唐突な印象すら聴者に与える。

唐突な印象を与える理由として、分裂文を例に考えてみたい。この文が談話の流れに合ったwh分裂文ではなく、どちらかと言うとit分裂文のほうに近いからではないかと考えられる(Em *Australia bai givim mani bilong helpim yumi*)。つまり焦点となる要素*Australia*が先に来て、前提となる要素‘*bai givim mani bilong helpim yumi*’が後行している。前提が先に来て、焦点が後続するほうが談話の流れに合致している。通常の語順とは異なった印象を与えているのは、そのような理由があると考えられる。そういう意味では有標の語順と言える。ただ、三つ前の文脈で、*bai yumi kisim dispela mani we*.(FTM - lpl - get - this - money - where)があり、談話の構成として、文頭に国名が出現しやすくなっていたことは事実である。加えて、豪州はニューギニアの宗主国であったという言語外の知識が、*Australia*という要素の出現の意外性を軽減している。ニューギニアは1975年に豪州から独立した後、これまで経済的な支援の多くを豪州から受けて来た。このことは多くのニューギニア人の知識としてある。したがって、外国からの援助の話になれば当然、豪州を念頭に置いた文脈が形成される。つまり先行文脈と暗黙の了解として意味的に結びついていると考えることができるのである。

*bai yumi kisim dispela mani we?*に対しては、*bai yumi kisim dispela mani long Australia*. とするのが談話の通常の流れである。つまり新情報が右のほうに置かれやすいという意味である。しかしここでは、*Australia*が文頭に立ち聴者の注意を引いている。そのような意味におい

ては、文頭の要素が新情報を担ってはいるが、部分的に旧情報を伝えているとも言える。

二つの文、*bai yumi kisim dispela mani we.* と *Australia bai givim \$127,800,000 bilong helpim yumi.* は述語動詞が異なり、どちらも無関係な文に見えるが、基本的な意味関係として、「お金の譲渡先が豪州からパプアニューギニアに移る」という点では同じである。主題が旧情報を担いやすいという一般原則からすれば、ここに国名が占めることは談話の流れから必然ではあった。たとえそれが未知の情報であったとしても、談話の構成がその文要素の出現を許容したと説明できる。

以下の用例(13)は上記*skulanka*の続きの文章である。これは*bai*後行型で、名詞句階層に即した働きをする。*edukesen bot* ‘教育省’ は組織／機関を表わす名詞で、背景に人の存在を連想させる。一方、目的語名詞は抽象名詞*nem* ‘名前’ である。ここでは*edukesen bot*が新情報である。

- (13) Em i tok tu olsem ol sumatin i
 he PM talk two so as to PL student PM
 ken stap long dispela kain skol long tupela
 can stay P this kind school P two
 yia tasol. Em i tok inap olsem 35
 year only he PM talk enough up to 35
 manki bai i stap long wanpela wanpela
 boy FTM PM stay P one one
 skulanka. Na tu wan wan praimereri skol
 school anchor C two one one primary school
 long olgeta distrik bai i gat dispel kain
 P altogether distrikt FTM PM get this kind
 skol. Olgeta distrik edukesen bot bai salim nem
 school altogether district education board FTM send name
 bilong skol ol i ting i gutpela long
 GEN school 3pl PM think PM Adj. good P
 mekim skulanka.
 make school anchor (Wantok-Trinde, 20 Septemba, 1972-Pes 11)

「彼は、生徒たちは 2 年間だけこの種の学校に通学できる、とも言っている。スクールアンカー一人につき、35 名の生徒まで受け持つことができる、とも述べている。この地区にある小学校に、この種の学校を設置することができる。すべての地区にある教育省は、スクールアンカーを配置するにふさわしい学校名を発表する」

上記例文中における、*bai*に前置する名詞句‘*olgeta distrik edukesen bot*’は、それ自体意味内容が豊かであるが、情報の重要度という点で言うと、一番右側の要素が重要である。実際その文要素を省略した下記の例文(14)は非文となる。

- (14) *Na tu wan wan praimeru skol long olgeta distrik bai i gat dispela kain skol. Olgeta distrik Φ
bai salim nem bilong skol ol i ting i gutpela long mekim skolanka.

またこの名詞句に含まれる*edukesen bot*を旧情報とみなすことも可能である。なぜならば、スクールアンカーを配置する権利があるのは教育省であり、聴者はそれを言語外の知識として連想または類推することが可能だからである。その場合でも、旧情報の中心は*edukesen bot*になる。

おわりに

以上、いわゆる無生物主語他動詞文における*bai*の性質を、*bai*先行型と*bai*後行型とに分けて考察した。

その結果、名詞句階層に即した働きを見せる場合、*bai*後行型は新情報を、その逆に同じ*bai*後行型でも名詞句階層に違反する働きを見せる場合、旧情報を担う、といった対応関係が認められる可能性が指摘された。

本論文では、従来の文レベルの考察から談話レベルへの考察へと転換を図り、それが有効であることが指摘された。無論、上記の図式に反する用例も散見される。一つの傾向性と指摘するためには、今後はもっと量的な研究が求められる。本稿では問題提起に留めておきたい。

注

*本稿では、文法的な注釈は以下のように略号で示されてある。FTM=未来時制マーカー /1sg=1人称単数現在/PM=述部マーカー/P=前置詞/AUX=助動詞/3sg=3人称単数現在/PL=複数表示/C=接続詞/1pl.=1人称複数/GEN=属格/Adj.=形容詞。

- 1 音韻的な縮約は、イギリス英語の地域方言にも見られるとして、*bimeby* (*e*) と*bambai*が紹介されている。詳しくは、Romaine (1988:69)。本論文で扱う*bai*は主に未来時制を表すが、原因や理由を表す文脈で生じることもある (Romaine 1988:152)。この例については研究対象から外している。
- 2 Mihalic (1971, p. 30, p. 63) によると、*bai*の変異形として、*bambai*と*baimbai*が報告されている。そして、*bambai*または*baimbai*は、主語の後ろに置かれることもあるとして次の

例文を取り上げている。*Mi bambai go. = I shall go. bambai*がこのポジションを占めることについて、筆者も含めて誰も報告していない。*bambai*がこの位置を占めることは理論的には可能であるが、筆者はこれまで、耳にしたことがないし、文献でも一度も見ることがない。特定の地域あるいは年齢と深く関わっている統語的な振る舞いかもしれないが、Mihalicには一切、その説明はない。フィマ村の人々も、このような表現をしないこともあって、ここでは資料から外してある。なお、*bambai*または***baimbai***は世界各地のピジン英語にも見られる。例えば、ハワイの日系人も日本語の統語法と同じピジンを使う中で、*baimbai*を用いている。詳しくは、Romaine (1988: 119)。

- 3 Mihalic (1971:63) にも、*bai*の意味的な側面について触れられた箇所がある。Sadler (1973) の言及したものと類似していると思われるが、*bai*は確実性を強調したいときにも使われることがあると言う。例は、*Bambai mi save. (= I will learn it.)* と *Bai mi painim. (= I'll find it.)*。

参考文献

- Atkin, R. (1973) *Jisas i givim tok bokis long Papua Niugini*. Madang: Kristen Pres.
- Crowley, T. (1990) *Beach-la-Mar to Bislama: The emergence of a national language in Vanuatu*. Oxford Studies in Language Contact. Oxford: Clarendon Press.
- Crowther, B. (1978) *Samting bilong bus i krai*. Wewak Christian Books Melanesia Inc.
- Dutton, T E. (1973) *Conversational New Guinea Pidgin*. Pacific Linguistics Series D-No. 12 Canberra: Australian National University.
- Jourdan, C. (1985) Creolisation, nativisation or substrate influence: What is happening to *bae* in Solomon Islands Pidgin. *Pacific Linguistics Series A-No. 72* pp. 67-96. Canberra: Australian National University.
- Keesing, R. M. (1988) *Melanesian Pidgin and the Oceanic substrate*. Stanford, California: Stanford University press.
- Kirsch Rev K. (1966) *Yumi ritim stori*. Madang: Kristen Pres.
- Mandao, M. (1969) *Ani i stap wanpis long biktaun*. Madang: Kristen Pres.
- Mihalic, F. (1971) *The Jacaranda dictionary and grammar of Melanesian Pidgin*. Brisbane: Jacaranda Press.
- Mühlhäusler, P. (1997) *Pidgin and Creole Linguistics: expanded and revised edition*. University of Westminster Press.
- 岡村徹 (2005) 『はじめてのピジン語』 東京：三修社
- 岡村徹 (2007) 『現代ピジン語辞典』 大阪：ミヤコアド印刷

- 岡村徹 (2013) 『オセアニアの言語的世界』 広島：溪水社
- Romaine, S. (1988) *Pidgin and Creole Languages*. London and New York: Longman.
- Romaine, S. (1992) *Language education and development: urban and rural Tok Pisin in Papua New Guinea*. Oxford: Oxford University Press.
- Sadler, W. (1973) *Untangled New Guinea Pidgin*. Madang: Kristen Pres.
- Sankoff, G. and Laberge, S. (1973) On the acquisition of native speakers by a language, *Kivung* 6: 32-47.
- Sievert, J (1980) *Kisim save moa*. Wewak Christian Books Melanesia Inc.
- Trobisch, W. (1967) *Mi laikim wanpela meri na mi pren long em*. Madang: Kristen Pres.
- Wantok Niuspepa (1972, 1973, 2004).